

構想の実現状況等（概要） ※得られたアウトカムを含む構想の実現の観点から記載すること【1ページ】

【Ⅰ. 事業全体の取組について】

千葉大学は「グローバル千葉大学の新生」という標語のもと、次の4つの改革を実行してきた。

(1) **ガバナンス改革による新生** 2016年4月には、国立大学初の「国際教養学部」を設置し、文理混合・課題解決・グローバル化を目指した教育を行った。2020年4月には、全国初となる研究科等連係課程の新たな枠組を利用した大学院「総合国際学位プログラム」を設置した。これらは千葉大学のグローバル化教育のモデルとなるパイロット学部・パイロット大学院の機能を果たしており、学部教育・大学院教育の改革に向けて着実な歩みを進めている。さらに、2024年4月に設置に至った「情報・データサイエンス学部」「大学院情報・データサイエンス学府」の準備過程にも文理混合・課題解決・グローバル化の理念を反映させた。

(2) **学修制度改革による新生** 国際教養学部で実施した全員留学は、学生の主体性・国際性の涵養に大いに資することになり、コロナ禍の影響をほとんど受けなかった学年においては、卒業までに40%以上の学生が複数回の留学を経験した。最大で長期・短期を含めて6回の留学を経験した学生もいた。これにより、「グローバル化教育」は必須と考える学生が入学するようになり、課題解決型の教育は他学部の学生にも大きな影響を与えるようになった。そこで千葉大学は2020年4月に入学した学生からENGINEプラン(Enhanced Network for Global Innovative Education Plan)を実施し、全員留学・英語教育改革・スマートラーニングの3本の柱で教育改革を行った。また、実施の改善計画をもとに、ENGINE2.0の構想を検討した。

(3) **プログラム改革による新生** 千葉大学は多様な学びのために専門領域を横断的に学修するダブル・ディグリーやダブル・メジャーの構築を目指している。その一環として、学部レベルで3つ(計画中のものと合わせて5つ)、大学院レベルで9つ(計画中のものと合わせて10)の副専攻(マイナー)を設置している。さらに、バンチプログラム(千葉大学版マイクロクレデンシャル)を導入し、現在6(計画中のものと合わせて8)のプログラムを運営している。これにより、専門以外の能力を獲得する複数の回路を形成している。

(4) **グローバルネットワークによる新生** 大学間交流協定の数は事業開始直前の300から515協定に大幅に増大した(172%増)。これを通じ、学生の派遣・受入の体制も整備され、バンコク、サンディエゴ、ベルリンの海外3キャンパスも研究・教育交流の拠点となっている。現在、海外の大学とのダブル・ディグリーは6か国、33件となっている。また、大学の世界展開力強化事業で採択された10件のプログラムは、本事業と連携して推進しており、メキシコ、パナマ、インドなど従来必ずしも緊密な連携が取れていなかった地域とのネットワークが確立された。

【Ⅱ. 事業期間での大学の成長（アウトカムとの繋がり）】

成長(1) 留学者数 日本人留学者数は事業開始直前には年間473名だったが、2023年度には2,581名へと飛躍的に増加した(5.46倍)。外国人留学生の受け入れでは、事業開始前の1,303名からコロナ禍直前の2,106名とほぼ倍増した。現在はコロナ禍による減少からの回復途上にある。

成長(2) ガバナンス改革 部局ごとに分散していた意思決定過程を大学本部のもとに集中し、教育関連では国際未来教育基幹、グローバル化関連ではグローバル・キャンパス推進基幹という学長を基幹長とする組織が設立され教育改革の中心となった。

成長(3) 学修支援 学修支援の専門職SULA(Super University Learning Administrator)を配置し、学修や留学の支援を体系的に行った。発令者は、国際教養学部設立時2016年の2名から、2023年には61名に増加した。

成長(4) プログラム改革 事業開始以前はゼロであった副専攻等が2023年度で学部副専攻3、大学院副専攻9、バンチプログラム6に増大した。

成長(5) 入試改革 英語の外部検定試験を利用した入試は2016年の国際教養学部に始まり、2024年度入試では医学部を除く全10学部が導入した。総合型選抜も医学部を除く全10学部が導入している。

成長(6) 英語教育改革 2020年から英語教育を抜本的に改革し、部局によっては卒業要件単位を倍増させ、1年次4単位、2年次2単位、高年次の専門英語2単位の計8単位とした。また、大学院共通教育にも英語能力の高度化を図るために7科目を設置した。イングリッシュ・ハウスを中心に授業外学修の機会を増大させ、1日当たり50に及ぶセッションを開催するようになった。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ】

【Ⅰ. 事業全般について】

〈成果1〉 国際教養学部等の設置 2016年に国際教養学部を設置し、2023年度までに720名以上の学生が本学部で学んだ。専門を限定しないメジャー制度(グローバルスタディーズ、現代日本学、総合科学の3メジャー)、レイトスペシャライゼーションの理念による文理混合教育、グローバルイシューベースの課題解決教育、CALLも駆使した高度な英語教育、留学中も千葉大学の講義を学ぶことができるスマートラーニングなど幾つもの特徴を持つ教育を実践することによって、千葉大学のグローバル化教育のパイロット学部としての役割を果たした。2020年には、国際教養学部の理念を継承し、新たに自己設計専攻(Self-Designed Major)を導入した大学院総合国際学位プログラムを設置した。2021年度には知識集約型社会を支える人材育成事業の支援も得て、集約タームとセルフ・デザイン・ギャップタームの組み合わせでイシューベースの教育を行うインテンシブイシュー教育を開始し、次世代のグローバル化教育とそのモデル展開の方法を開発している。

〈成果2〉 ENGINEプランの実施 2020年から国際教養学部の実践を基盤として、全員留学、英語教育改革、スマートラーニングを3本の柱とするENGINEプランを実施した。これはスーパーグローバル大学創成支援事業の自走化の資源ともなり、授業料改定をもとに、新たな留学プログラム開発、留学・学修支援、外国人教員の雇用、授業のIT化・DX化のインフラ整備などを可能にした。(1)ENGINE導入以前に年間1,000名弱であった日本人留学者数を2023年度には一挙に2,581名にまで増加させることができた。(2)英語教育改革では、1年次にDiscussion, Writing, Interaction, Presentationのコミュニケーション英語4科目、2年次にEnglish for Specific Fields, Critical Thinking in Englishの専門英語への架橋2科目を必修とし、これをCALL英語で支えるとともに、学部高年次で医学英語、工学英語、科学英語等の専門英語を最低2単位必修とするなど体系的な英語教育に転換した。また大学院共通教育においても英語運用能力の向上のためにプレゼンテーション英語・会議英語等7科目を開設した。(3)スマートラーニングでは、メディア授業に関わるコンテンツ作成支援、インフラ整備、LMS支援等を通じて、留学中の学生にとっても「いつでもどこでも学べる」体制の構築が可能となった。

【Ⅱ. コロナ禍への対応について】

〈成果1〉 オンライン留学プログラムの開発 ENGINEプランを導入した2020年はコロナ禍の開始のその年であった。長期留学中の学生個人々の帰国を促し、千葉大学における学修に復帰させる試みと同時に、全員留学を実現するために、渡航に代えて急遽オンライン留学の機会を大規模に作り上げるという前例のない取組を開始した。ここでは、(1)学生に選択の機会を与えるためにおよそ2,400名分のオンライン留学の枠を作り出し、2021年度で約1,300名の学生がこれを利用した。(2)オンライン留学の質を担保するために、海外協定校に依頼して有償のプログラムを設定してもらい、教員・教材・カリキュラムを双方向性に最大限留意するよう質保証につとめた。(3)オンライン留学において現地学生との交流の機会を導入し、ホストファミリーを用意してヴァーチャル・ツアー、ヴァーチャル・ホームステイの機会を設ける等、オンライン留学に適合的な新たな試みを実行した。(3)オンライン留学ではじめて可能となるようなプログラム開発、特にパナマ、ジャマイカ、チリといった中南米諸国等遠隔地のプログラム、米国、ウガンダの大学と千葉大学を3点で結ぶプログラム等オンラインのメリットを生かした多点間の留学を実現した。

〈成果2〉 COILの応用 千葉大学は大学の世界展開力強化事業の一環として2018年からCOIL(オンライン国際協働学修)を導入していたが、これはコロナ禍においても途切れることなく、むしろ科目数を増加させて実施することができ、COILのようなVE(Virtual Exchange)は、コロナ禍のような状況にも適合的でグローバルな学びを途切れさせないための有効な手段であることを証明した。

〈成果3〉 スマートラーニングの実現 千葉大学はENGINEプランの柱のひとつとしてスマートラーニングを掲げていたため、すでに実施体制の整備(スマートラーニングセンターとスマートオフィス)が行われており、コロナ禍におけるメディア授業対応をスムーズに行うことができ、混乱を避けることができた。また、Moodle等のLMSも、新たにGoogle Workspaceを導入して危機や負荷の分散を図り、クラウド化を一気に進めることで安定的なインフラの提供を可能にした。同時に国際共修を可能にするために、海外の学生も利用可能なCOIL Moodleを設置するなど、スマートラーニングを実現するための全面的な取組を実現した。